

付論 日置の古地理環境

石田泰弘・鬼頭 剛・藤山誠一

1. はじめに

日置本郷B遺跡のある愛知県愛西市日置町は、近世以前の尾張国の中南西縁辺部にあたり、かつては海水域がひろがっていた地域と考えられている。その為、この地域における考古学的資料の蓄積は進んでいなかったが、「佐屋町史」において服部元之氏が地表面の考古遺物の表面採集などによる地道な成果により、人間の営みが古墳時代初期になって始まる 것을明らかにされた（註1）。服部氏は佐屋地域における遺跡分布の時期的変遷を通じて、遺跡の展開を3段階に分けて論じており、日置本郷B遺跡のある現在の愛西市日置地域を第1地域として弥生時代後期にさかのぼって開発された地域であることを指摘した。その後湯浅龍二氏・赤塚次郎氏・江崎武氏らによるあま市に所在する蜂須賀遺跡の出土遺物の分析を通じた「海部の古道」の指摘があり（註2）、赤塚次郎氏・石黒立人氏・宮腰健司氏・城ヶ谷和弘氏・池本正明氏による津島市寺野遺跡などの出土遺物の分析を通じた遺跡の評価と津島地域の考古学的分期を4段階に分けて論じられている（註3）。このような遺跡の時期的消長の存在と遺跡の時期的変遷がみられることは、愛知県の海部津島地域において多様な歴史的展開が存在したことを示唆しており、興味深い研究成果である。本論では、このような遺跡における歴史的展開がおこる背景について、明治17年作成の地籍図を利用した解析と現在の表層地形に刻まれた起伏の分析、そして考古学的資料による遺跡の分析と当地域に残る文献資料の分析を総合して明らかにしていきたい。

なお、本論における地名の表記は、近年の市町村合併に伴い変更された地名ではなく、西暦2000年（平成12年）時点の市町村名を使用し、明治17年作成の地籍図の解析に関する部分において、地籍図中に記載された旧村名を地域名として表記する。

2. 旧日置村周辺の地籍図の解析

(1) 方法

ここでは明治17年作成の地籍図について現在の愛西市日置町を中心とする地区で、愛知県公文書館所蔵の向島村、津島村（甲・乙・丙がある）、見越村、根高村、古川村、中地村、袖木村、内佐屋村、佐屋村、須依村、日置村、稻葉村、北一色村、甘村井村、落合村、唐白村、中一色村、犬井村の地籍図を図化し、解析を行った（図53）。地籍図の解析方法は、地籍図に残る地目により寺院・神社・宅地・畠地・林・藪・水田・草生などに分類して図化した。そして宅地や寺院や寺社・畠地が相対的に標高の高いところに、水田などが低いところで當まれるという我々の経験的な認識に基づいて、地籍図の地目が神社・寺院および宅地・畠地・林・藪の部分を微高地群とし、水田と草生などの部分を低地部として分け、その特徴と微高地群どうしの前後関係について述べる。

(2) 地籍図に見られる微高地群と低地部の抽出 微高地群について図53の北西側から述べいく。

向島村の佐屋川東岸の堤防に伴う佐屋川東堤微高地群、向島村の北部中央から南西にのびる向島西微高地群、向島村東縁部を南北にのびる向島東微高地群、津島村の天王川の東岸の部分で字愛宕の北西端部にいたる藤波微高地群、中地村の西側で天王川から南南東にやや弧状に広がる中地西微高地群、大慶寺池から中地村東側を南東にのびる中地東微高地群、津島村字愛宕を西北西から東南東にのびる愛宕微高地群、新堀川の東岸を根高村から見越村にのびる根高見越微高地群、津島村字高畠と寺前付近から南に津島村字柳原東部にいたる寺前柳原微高地群、津島村字埋田から南に津島村字愛宕の東部にいたる埋田愛宕微高地群、根高村の南側から津島村字立込の東側を通り津島村

日置本郷 B 遺跡

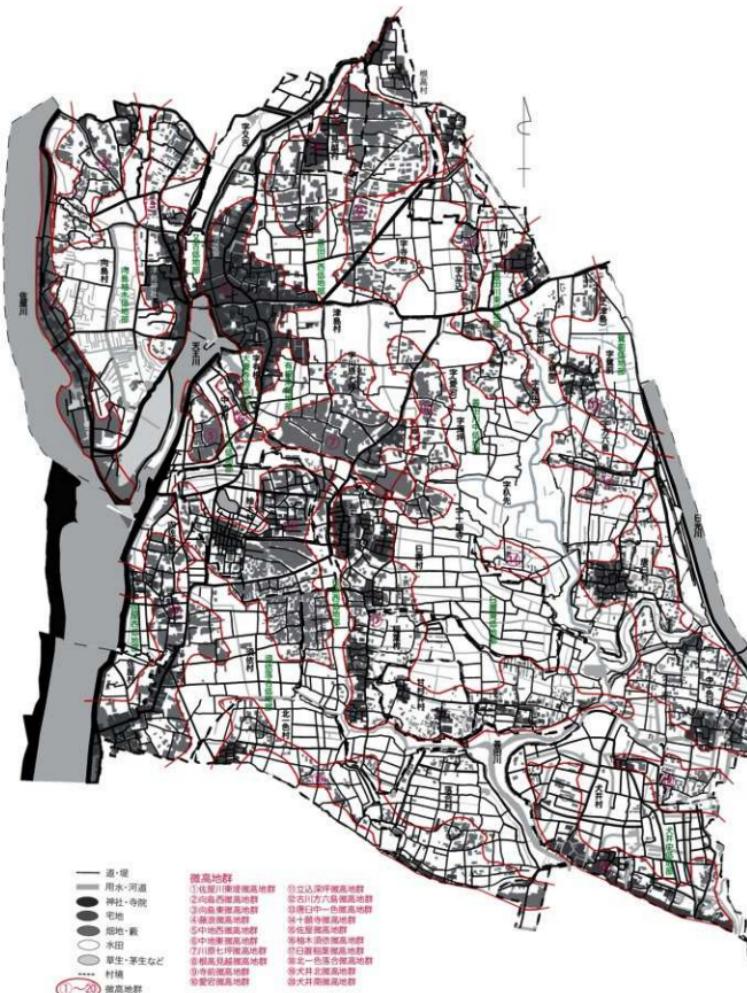


図 53 愛西市日置町周辺の地籍図（約 1/30,000）

付 論

字深坪へ南北にのびる立込深坪微高地群、古川村から南東の津島村字新聞にいたる古川新聞微高地群、津島村字南新聞から南東に広がり唐白村の中央部を通り南東にある中一色村にのびる唐白中一色微高地群、津島村字元寺にある西北西から東南東に畠地が散在する元寺微高地群、内佐屋村から須依村の西端部を通り佐屋村に弧状に展開する佐屋微高地群、袖木村南東部から須依村北東部と日置村西瀬を経て稲葉村北端部にいたる袖木須依微高地群、日置村中央部から稲葉村中央部と甘村井村を経て稲葉村南東部にいたる日置稲葉微高地群、北一色村西部から落合村南東部にいたる北一色落合微高地群、大井村北東部から中一色村南端部にひろがる大井北微高地群、大井村の南縁部を善田川の北岸に沿ってひろがる大井南微高地群がある。

同様に低地部を述べいくと、向島西微高地群・佐屋川東堤微高地群と向島東微高地群に挟まれた向島袖木低地部、向島東低地部と根高見越微高地群・藤浪微高地群に挟まれた南側は天王川につながる又吉低地部、中地西微高地群と中地東微高地群に挟まれて南側を袖木須依微高地群まで含む中地低地部、中地東微高地群と藤波微高地群の南端部に挟まれた車河戸・大慶寺池低地部、藤波微高地群の南端部と愛右微高地群に挟まれた愛右西低地部、北側を藤浪微高地群と根高見越微高地群・寺前柳原微高地群に南側を愛右微高地群と埋田愛右微高地群に挟まれた善光寺川西低地部、北側を寺前柳原微高地群・埋田愛右微高地群と立込深坪微高地群に南側を元寺微高地群、唐白中一色微高地群に挟まれた善光寺川中低地部、立込深坪微高地群・唐白中一色微高地群と古川新聞微高地群に挟まれた善田川東低地部、古川新聞微高地群の東にある新聞低地部、佐屋微高地群の西にある佐屋西低地部、北西側を佐屋微高地群と袖木須依微高地群の南側部に南西側を北一色・落合微高地群と日置稲葉微高地群の南側に挟まれた善田川にいたる須依落合低地部、袖木須依微高地群と愛右微高地群・日置稲葉微高地群の北側に挟まれた日置西低地部、北西側を日置稲葉微高地群と埋田愛右微高地群に南西側を日置稲葉微高地群・大井北微高地

群と元寺微高地群・唐白中一色微高地群の南側に挟まれた日置東低地部、大井北微高地群と大井南微高地群に挟まれた大井中低地部がある。

(2) 微高地群の特徴

これらの微高地群は津島村の北端部から向島村の北端部では北東から南西にのびる傾向がみられるが、全体では北西から南東にむかって帯状にのびる傾向が顕著である。この中で近接・隣接している微高地群においては本来は一つであった可能性があり、例を挙げれば向島東微高地群の北側と向島西微高地群が北東から南西にのびる可能性があることや寺前柳原微高地群と埋田愛右微高地群、立込深坪微高地群と唐白中一色微高地群はその位置関係からは南北につながっていたそれぞれ一つの微高地群であった可能性が高い。これらが地籍図において分断されているのは、その後に新しい河川が流れたり、用水が掘削されて水田が広がった為に低地部に変わったなどの理由が考えられる。

対反に大きな微高地群を形成しているものは、複数の微高地群が重複して大きな微高地群に見えるものもある。例えば根高見越微高地群は立込深坪微高地群が根高村の南側から、寺前柳原微高地群が津島村字寺前西側付近から分かれて南下するする点や、同様に津島村字愛右の南西部で愛右微高地群と埋田愛右微高地群と日置稲葉微高地群が重なっており、本来は別々に形成されたものが一つの微高地群になったと考えられるものもある。

また一定の基準に基づくと別々にみえる微高地群ではあるが、根高見越微高地群と藤浪微高地群、向島東微高地群の南側・愛右微高地群・袖木須依微高地群・日置稲葉微高地群はより大きな視点をもつと一つの大規模な微高地群とも捉えることができる。

(3) 地形の新旧関係

以上の分析から、地形の新旧関係を分析する。明治 17 年作成の地籍図に描かれている主な河川は西から佐屋川と天王川、善田川があり、地籍図の上流で佐屋川は領内川と、天王川は領内川と日光川、三宅川と善田川は三宅川から分岐する河川であり、地籍図に描かれた佐屋川と天王川は、愛

日置本郷 B 遺跡

知県所蔵の元禄期に描かれたと考えられている『尾張国絵図』にみるよう、江戸時代前期にさかのぼる可能性が高く、日光川も後述する図 56 にみるよう 18 世紀中頃の掘削である。よって佐屋川に直接関係する佐屋川東堤微高地群と天王川に関係する向島東微高地群と根見越微高地群・藤浪微高地群に挟まれた又吉低地部、日光川に関連する古川新開微高地群と新開低地部を除くとその他の地形は江戸時代前期より古い地形といえる。

次に江戸時代前期に流れている天王川とその旧河道である又吉低地部に直接つながる低地部は藤浪微高地群の北東より続く善田川西低地部とそれに続く愛宕西低地部、藤浪微高地群の南より車河戸大慶寺池低地部、中地低地部、須依落合低地部、中地低地部より続く日置西低地部がある。須依落合低地部は北西側で佐屋微高地群と袖木須依微高地群が接している部分があるので、中地低地部より古い可能性があるが、これらは江戸時代前期以前の天王川の旧河道と関連するもので、中世にさかのぼる可能性がある。同様に佐屋川に直接つながる佐屋微高地群とその西にある佐屋西低地部も江戸時代前期以前に佐屋川と関連する旧河道である可能性が高い。また向島袖木低地部は近世以後の堤である佐屋川東微高地群を挟んで北西側で佐屋川に続いている、南東側で天王川の堤防を挟んで続いている。よって、これらの地形に関連する微高地群に閉ざされているその他の低地部とその低地部を挟む微高地群は、中世以前に形成された地形と考えられ、地籍図の東側では、善田川と関連する流路がこれらの微高地群を切って流れている箇所が多く見られる。(陰山)

3. 愛西市日置周辺の表層地形解析

(1) 分析方法

愛西市日置地域がどのような場所に立地するのか、また、日置周辺の河川の変遷を調べるために、津島市から愛西市にかけて現在の表層地形解析のために等高線図を作成した。等高線図の作成には「愛西市都市計画基本図(1/2,500)」の平成 17 年

(2005 年) 修正版にプロットされた標高値を用いて鬼頭が作成した(図 54)。

(2) 表層地形の解析結果

東西 4.3 km、南北 3.9 km の範囲において、等高線間隔 0.2m(一部で 1.0 m) で標高 -2.6 m から標高 6.0 m までの等高線が描ける。解析範囲の現在の状況は西に海部幹線水路が南流し、東には善太川が北から南へ向かいほぼ一直線に流れ。海部幹線水路に並行してその東側に国道 155 線が通っている。図の中央には名古屋鉄道尾西線があり、北側で尾西線と津島線とに分岐する。

解析範囲全体では北西側において標高 0m 以上で相対的に標高が高く、南東側に向かうにしたがって次第に低くなる。解析範囲は典型的なゼロメートル地帯であるため、標高の低いところでは標高値がマイナスとなることに注意が必要である。標高がもっとも高いのは津島市下新田町で標高 6.0 m を超すところが見られ、本地点も含めて北の津島市河田町から下新田町、大堀町、宮川町まで、現在の津島高等学校の所在する範囲には標高 0 ~ 6 m までの延長約 2.8 km におよぶ尾根状に高い部分が認められる。いっぽう、標高のもっとも低いのは愛西市庄屋敷から大正にかけて標高 -2.6 m が認められる。本地点も含めて、北の津島市秋前町から元寺町、愛西市日置町、愛西市金町、落合町にかけて標高 -2.0 m よりも低い地域が広がる。

本論ではかつての河川流路跡の解析を目的とするため、主に等高線図にあらわされる谷状の地形に注目する。範囲の西側から順に述べる。海部幹線水路の東側には水路に並行して津島市大堀町から愛西市四会町を通り開田、津島市東野方町、愛西市森川町に至る南北方向の谷地形がみられる。北の津島市河田町から江西町、江東町、老松町を通り宮川町までに標高 -0.8 ~ 0 m の東西の最大幅約 0.6 m、南北約 2.4 km の谷状地形がある。この谷地形には天王側公園の丸池を含む津島市宮川町から老松町までの谷地形が南側で合流している。解析範囲北の津島市又吉町から城山町までには標高 -1.0 ~ 0 m までの池状の凹地がみられる。解析範囲の東、津島市埋田町から古川町にか



図54 愛西市日置町周辺の等高線図

けては東西方向に約8.8 kmの距離をもって低地がみられ、そこを谷頭として南方向へ津島市深坪町、秋前町に至る標高-2.6～-1.2 mで距離約2.0 kmの谷地形が認められる。この谷地形には、津島市弥生町から今市場町、橋町を通り深坪町に至る標高-1.8～-0.4 mの北西・南東方向の谷地形と、東端の津島市郷城から新開町を通り、秋前町に至る標高-2.4～-1.0 mの南北方向の谷地形

が深坪町・秋前町で合流する。また、それまでの谷地形が南北方向を向いているのに対して、津島市中地町から南本町、愛宕町までの標高-2.6～-0.8 mで西から東へ開口した谷地形がある。この谷の南には津島市常盤町から愛西市柚木町、須依町に標高-2.6～-0.8 mの南北方向の谷がみられる。この谷には愛西市内佐屋町から柚木町にかけて標高-1.4～-1.2 mの西から東へ向けて開

日置本郷 B 遺跡

口している谷地形が須依町で合流する。津島市常盤町から須依町にかけてみられた谷地形の、尾根状地形を挟んでさらに東側には愛西市柚木町元屋敷曲輪を谷頭として、愛西市日置町河平、日置町上川田、船葉町、北一色町にいたる標高-2.4～-0.8 m の南北方向にのびる距離約 2.3 km の谷地形が認められる。この谷地形は、津島市常盤町から愛西市日置町本郷、船葉町江頭まで、南北の距離約 1.3 km で南側で閉じた舌状の尾根地形の西縁を通り、この尾根地形の東端に調査地がある。

(3) 地形解説結果からわかること

表層地形解析の結果から推定できる地形の特徴を挙げる。解析範囲の地形は標高 0m 付近の等高線を境として、それよりも西ないし北西側に認められる地形と、東側でみられる地形とで大きく分けられそうである。西ないし北西側では等高線間隔が非常に密であり、標高の高いところと低いところとの差が大きい。地形にこのように明瞭な差異を生じさせたためには、流路の位置が固定されてあまり移動をせず、もともとの地形を破壊することなく堆積物を上方へ累積させる必要がある。だが、本論の解析範囲は沖積低地の三角州域にあたり、上流から運搬されてきた堆積物を溜める場所にあたっている。濃尾平野の三角州域は洪水多発地帯としても知られており、河川流路が長年に渡って自然の状態で固定されたままでいることは難しく、人工的に河川流路を固定された可能性がある。例えば、海部幹線水路に並行して東側に認められる谷地形や、天王川公園の丸池を含む津島市宮川町から老松町までの谷地形などは、流路の両脇を標高値の高い尾根状の地形で挟まれており、人工的に流路を固定されているものと思われる。

いっぽうで、解析範囲の東側では標高 0m よりも低い等高線からなり、等高線間隔は広く、相対的な標高差も小さい。推定される谷地形の方向も南北方向を向くもの、北西・南東方向を向くもの、西から東へ開口しているものなど、方向に一定の傾向がみられない。これは、かつて東側を流下していた河川流路が頻繁に移動をしたためと考えられ、等高線間隔が広いことや相対的な標高差が西

側に比べて小さいことも、流路が固定されず、上流から運ばれてきた堆積物が周辺に分散された結果であると考えられる。また、西側でみられる谷地形がほぼ南北方向を向き、さらに北側へ連続するようにみられることと比べて、東側でみられる谷地形は谷頭が解析範囲の途中から現われて、それよりも北には連続しないものがみられる。例えば、津島市埋田町から古川町にかけて谷頭として津島市深坪町や秋前町に至る谷地形がそれにあたる。現在の海部幹線水路や善太川が解析範囲のさらに北から流下してきていることを考慮すると、途中から谷頭がはじまっている谷地形は、現在の河川流路とは異なるかつての流路跡であると考えることができる。愛西市日置本郷地域にも津島市元屋敷曲輪を谷頭として愛西市河平、船葉町、北一色町に至る谷地形が認められることから、途中から谷頭が現わって北側には連続しない特徴をもち、調査地は堆積システムの古い地形の上に立地する。解析範囲の西ないし北西側と東側とで、等高線の特徴から推定される地形的な特徴の差異は、地形を生じさせた堆積システムの新旧の差を現わしているのかも知れない。この推論の証明には堆積層序や堆積年代の確認、地形表層からの考古遺物の採取などが必要であり、今後の課題となる。

以上をまとめると、つぎのことがわかる。

1. 標高-2.6～6.0 mまでの解析範囲全体では西ないし北西側で地形が高く、南東へ向かい次第に低くなっている。
2. 解析範囲に現われる等高線の特徴や谷地形の方向から、標高 0m を境として西ないし北西側の地形と東側の地形とで大きく 2 分される。
3. 西ないし北西側の地形は、南北方向の谷地形が標高差の大きい尾根状の地形に挟まれており人工的な影響が大きいように思われる。対して東側の谷地形は標高差も小さく方向に傾向がみられないことから、自然の状態がより残っているようである。
4. 上記の地形的な特徴は堆積システムの新旧の差を現わしている可能性があり、調査地点は古い堆積地形の上に立地している。

（鬼頭）

4. 分類・抽出した地形の評価

それでは、地籍図において抽出した地形分類と表層地形の解析から認められた地形はいかなる関係をもつてであろうか。ここでは、その対応関係と抽出された地形と遺跡の位置関係を分析し、その特徴を述べたい。

(1) 微高地群の区分と表層地形との対応関係(図55)

地籍図をもとに集落とまわりの畠地、さらにそのまわりに広がる水田の分布パターンをもとに20の微高地群と、相対的に低い14の低地部が区分された。表層地形解析では西ないし北西側で標高が高く、標高差の大きい尾根状の地形が特徴的であることと、南東側に向かい次第に低くなり、標高差が小さい東側の地形とに2分された。ところで、微高地群の設定は地籍図の土地利用の状況をもとに描かれるが、微高地群と低地部とを認識し区分する作業には主觀がある可能性がある。ここでは、設定された微高地群および低地部を表層地形解析の結果と比較して、その妥当性を検討する。なお、微高地群を設定した地籍図範囲と表層地形解析を行なった範囲とは完全には一致しておらず、地籍図の範囲の方が若干広い。

地籍図をもとに微高地群は20に区分され、表層地形解析の結果においてもそれぞれの微高地群に対応した、まわりよりも相対的に高いところがみられる。さらに詳しく検討してみると、例えば遺跡の立地する日置植葉微高地群(微高地群17)は北の日置八幡宮から植葉村を通り、甘村井村までが一連の微高地群と設定されているが、表層地形解析では愛西市江頭において東西方向の谷地形が微高地との間を貫いており、江頭よりも南側の甘村井に続く微高地とはまた別のものと読み取ることができる。だが、おおよその微高地群のパターンは、表層地形解析の相対的に標高の高い地形と対応する。なお、犬井北微高地群(微高地群19)は表層地形解析の範囲外にある。

次に地籍図の低地部と現在の谷状地形との対応をみてみる。向島柚木低地部は津島市河田町から

江西町、老松町、宮川町に見られる谷状地形に、又吉低地部は現在の天王川公園の丸池と津島市又吉町から城山町の谷地形に対応をしている。善田川西低地部および善田川中低地部は津島市弥生町から今市場町、深坪町に至る谷地形に対応し、善田川東低地部は津島市郷城から秋前町に至る谷地形に対応をしている。設定された低地部と表層地形解析に現われる谷地形とは、微高地群と同じようにおおよそ対応するようである。このように、地籍図に設定された微高地群と低地部の分布パターンは、表層地形解析から読み取れる現在の地形の起伏と比較的良好に対応をしており、地籍図をもとにした微高地群と低地部の区分には妥当性がみられる。

さて、大局的にみれば良い対応関係を見たが、ひとつひとつをさらに詳しく見ると、地籍図の微高地群・低地部パターンには現われない表層地形の起伏が存在することも指摘しておかねばならない。例えば、遺跡の立地する愛西市日置町周辺には日置八幡宮から植葉村、甘村井村までの日置植葉微高地群(微高地群17)と、その西側には日置西低地部、東には日置東低地部が設定されている。表層地形解析ではこの日置西低地部のさらに西側には、南北方向にのびる尾根地形を挟んで津島市常盤町から愛西市柚木町、愛西市須依町にかけて谷地形が認められ、地籍図では柚木須依微高地群(微高地群16)と一括されている範囲内にも微小さな谷地形が認められるのである。また、日置植葉微高地群(微高地群17)の東縁境界線には、地籍図には現われないさらに微小な複数の谷地形が東方向に開口して認められ、地形変化には時代の異なる堆積システムが関わっていそうである。このような水平距離にして1kmに満たない規模の地形の成り立ちを考えるときにこそ、考古遺跡の発掘調査で得られた情報が必要になってくるのである。
(鬼頭)

(2) 推定される地形と遺跡との位置関係

それでは、地籍図において認められた微高地群の形成時期はいつ頃であろうか。現在の表層地形にみられる、等高線の特徴や谷地形の方向から、標高0mを境として人為的影響の大きいと思わ

日置本郷 B 遺跡

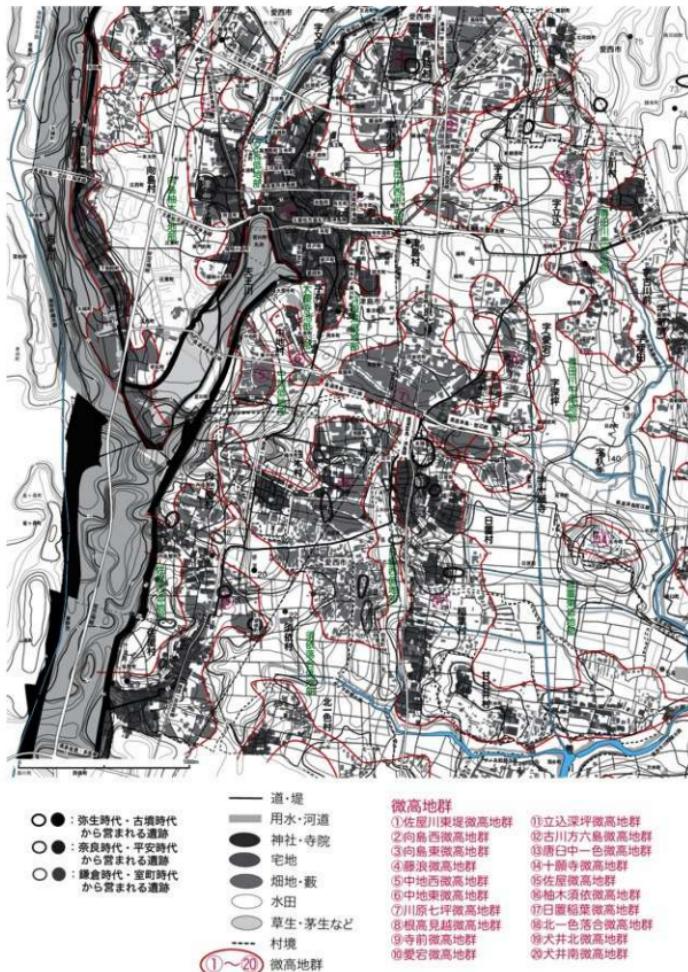


図 55 地籍図と等高線図の対応関係 (遺跡番号は本書第 1 章表 1 に対応する)

れる西ないし北西側の地形と自然の状態がより残っていると思われる東側の地形とに二分され、その分布範囲は、先に見た地籍図から分析した微高地群と低地部からなる地形の新旧関係と大まかに対応している。

次に表層地形図に遺跡の分布と微高地群の分布を重ねると、古墳時代以前の遺跡は西から③向島東微高地群の上に親音町 A 遺跡（遺跡番号 129、古墳時代）、④藤浪微高地群の上に南本町遺跡（遺跡番号 134、弥生時代～江戸時代）、⑩立込深坪微高地群の上に埋田遺跡（遺跡番号 132、弥生時代～鎌倉時代）、⑯佐屋微高地群の東にある須依落合低地部の中に砂山 A 遺跡（遺跡番号 20、弥生時代～中世）、⑪立込深坪微高地群の南西にある善太川中低地部の中に八町遺跡（遺跡番号 78、古墳～鎌倉時代）、藤浪微高地群の東にある善太川西低地部の中に橋町遺跡（遺跡番号 136、古墳時代中期）、⑯日置稻葉微高地群の上に日置八幡宮遺跡（遺跡番号 2、弥生時代・古代～近世）がみられる。これらをみると、地籍図において検討した地形の新旧関係には關係なく、抽出した微高地群の形成時期は全て弥生時代から古墳時代以前にさかのぼる可能性が高いことが確認できる。したがって先に述べた地形の新旧関係は、新しい時代の漸替えや策堤などといった人為活動の影響の強さの違いを反映しているようである。この点については、表層地形において指摘した標高 0 m を境にみられた地形の差異、例えば標高差の大きい尾根状の地形に挟まれた南北方向の谷地形で人工的な影響が大きいように思われる西ないし北西側の地形に比べて谷地形の標高差が小さく、谷の長軸方向に傾向がみられないことから自然の状態がより残っているそうである東側の地形、という理解にもかなうものと思われる。そして地籍図の低地部にある遺跡は、詳細にみると明治 17 年の土地利用において微高地群には含まれないものの、表層地形の解析においてみられる谷地形の中央に位置するのではなく、微高地の尾根の縁辺と考えられる位置に立地しており、古い時代の遺跡がみられる地点が明治 17 年の地籍図よりも、地形の起伏に忠実に対応して分布する傾向がみられるよう

である。

(藤山)

5. 文献資料からみた旧河道と日置

(1) 文献からみた古代の海部地域

日置という地域がいつ頃からあったかについては詳らかではない。海部郡自体が往昔どうであったかも詳らかではない。

ただ、飛鳥京跡菟池遺構から出土した木簡に「戊寅年十二月尼張海評津嶋五十戸 韓人部田根春赤米斗加支各田部金」という文言が確認され、天武天皇 7 年（678）時「海評」すなわち海部郡が存在していたことは確実である。

正倉院文書にも「尾張国海部郡津積郷」、「尾張国海部郡志摩郷」といった記述が確認でき、いくつかの郷が存在していたことがわかる。10 世紀に成立したといわれる「和名抄」によれば、海部郡内に

新屋・中島・津積・志摩・伊福・嶋田・海部・日置・三方・物忌・三宅・八田

12 の郷があったことがわかる。ここに日置郷の名が確認でき、恐らくこの記事が日置の初見であろう。

927 年の「延喜式神名帳」をみると、海部郡内に八社名を確認できる。

漆部神社、諸歎神社、国玉神社、藤嶋神社、宇太志神社、由乃伎神社、伊久波神社、憶惑神社

由乃伎神社－諸歎神社－憶惑神社－藤嶋神社といったラインは、佐屋路に沿って存在しており、水野時二のいうように、この佐屋路が条里との関わりを有する（註 4）とすればこの神社の分布は興味深い。また諸歎神社の所在する諸桑の満成寺裏から 1838 年いわゆる「諸桑の古船」が出土している。この古船は 20 m 余という大きな船で準構造船ともいわれている。満成寺もこの地の白砂青松に魅せられ寺を建立したともいわれている。諸桑の地が古代の海岸線沿いの集落であった可能性が高いのではないかろうか。

「延喜式兵部省」をみると、古代東海道で伊勢の桜撫から馬津、新溝といった駅が存在したこと

日置本郷 B 遺跡

がわかる。馬津駅の比定地は近世以来様々な説があるが、有力とされる説に、現在の愛西市町方町の松川説と津島という説がある。「尾張国都司百姓等解」に「就中馬津渡、海道第一之難處、官使上下之留連處也」という記事があり、さらにその近辺には、「海路」、「白浪忽起、任身於鯨鯢之脣」といった記述も散見しうることから、馬津辺りは海に近い地であったと思われる。

これらのことを考えると、古代の海岸線を比定するについては、(馬津)一袖木一置一諸桑一神守一秋竹という文献上確認できるラインを視野にいれて検討すべきであろう。

(2) 海東郡・海西郡の郡界と河川の変遷

『佐織町史通史編』によれば、11世紀頃に海部郡が海東・海西郡に分かれたのではないかと推測されている。

1283(弘安6)年に制作された滋賀県松尾寺蔵額口に「海西郡三腰」という銘が確認できる。

三腰は当時海西郡であったことがうかがえる。(応永5)年の賀生院所蔵の「病者加持秘事」の奥書には、「尾州海西郡門真庄天王宮」とある。津島も海西郡となる。(応永6)年の賀生院所蔵「寶朱水」の奥書にも「尾州海西郡門真庄三腰極楽寺」という記述が確認され、この時点もなお三腰は海西郡であった。

1403(応永10)年銘のある津島神社鐘には「海西郡津嶋」とあることからこの時期まだ津島は海西郡であった。

1418(応永25)年の「尾張国守護斯波義淳進行狀」をみると、「海西郡内西野高村」とある。同時に発給された「足利義持書狀」をみると「尾張国日置庄内西野高村」とあり、西野高村は日置庄内に位置し、海西郡であったことがわかる。西野高村がどこにあったかは未詳であるが、日置庄内ということで日置近辺とすれば、日置あたりは海西郡であったと想定する。

『張州雜志』所収の1324(正中2)年「某下文写」をみると、「海東一百丁内 衣縫」とあり、百町、犬井が海東郡であったことがわかるし、1447(文安4)年の「万徳寺糸論」の奥書をみると、「海東郡佐折」とあり、佐折も海東郡であったことが

わかる。

『尾張志』所収の1450(宝徳2)年「万徳寺糸論」の奥書には、「海東郡富吉庄大野」とあり、大野も海東郡であった。

これらの記述等から、当時の郡界は見越・日置の東側で、大野・大井の西側にあつたことが指摘しえよう。旧善太川が、諏訪(現在の愛西市諏訪町)あたりから南下して流れていたといわれており、恐らく旧善太川の河道が郡界であったと考えるのが妥当ではないか。

ただ、1499(明応8)年の熊野那智大社「旦那光券」をみると、「かひたふの郡みこしのくう藏坊」とあり、見越が海東郡に編入されていることがわかる。

この間に大きな河道の変動がみられたのではないかろうか。1498(明応7)年8月には明応の地震が起こっており大きな被害があったといわれていることからすれば、この地震の影響も想起しえよう。

『海道記』の1223(貞応2)年4月7日条をみると、

市駿を立ちて、津島の渡という所を舟にて下れば、蘆の若葉あをみわたはりて、つながぬ胸もたちはなれず、菱の浮葉に浪はかれども、難面かはづはさわぐけもなし、とりこすさをの半袖にかゝりたれば、さしてものを思ふとなしに水駒れ浪に袖は満しつ渡りはつれば尾張國にうつりぬ、片岡には、朝陽の影うちにさして、焼野の草に堆なきあがり、小籠ヶ原に駒あれて、泥みしけしき引きかへて見ゆ、又園中に柔の下宅あり、宅には蓬頭なる女、簀にむかひて蠶養をいとなみ、園には倒たる翁、築を持ちて農業をつとむ(以下略)

とある。市駿から津島の渡を経て尾張國へ入る様子が描かれている。この『海道記』の記述にしたがえれば、市駿は伊勢に属し、津島と市駿の間に国境そして大河が存在していたことになる。

この『海道記』の段階においては、津島と思われる地は牧歌的な風景が描かれており、当時はまだ町場化していなかったことがわかる。

付 論

図 56 天明五巳年天王川御堀割御普請已來之図

日置本郷 B 遺跡

『宗長手記』の1526（大永6）年条をみると、此所のおの堤を家路とす、橋あり三町あまり、熱（勢）田の長橋よりは猶遠かるべし、および州俣河落合、近江の海ともいふべし。

とあり、堤を中心、家が立ち並び、町場化していることがうかがえる。大きな橋があり、「および」と「州俣」の両河川が守鳥辺で合流していたといふ。川名等を精確に把握していたかどうかは詳らかではないが、大河川が守鳥辺で合流していたということは当時の地理的景観を考える上で重要であろう。

豊臣秀吉や尾張藩によって、木曾川の流路の変わり、築堤等によって河川の安定化が図られた。

天正の洪水によって木曾川の流路が変わり、その後世に言う尾張側が三尺高いといわれている「御園堤」が築かれ、尾張藩の治水に有効であったということは、事実であったかどうかは別にして夙に知られている。

しかし、今日でいうところの木曾三川下流域においては、低地ゆえ已然水害を被ることが多く、御手伝普請等による治水工事が実施された。中でも広く知られているのが宝曆期に薩摩藩によって実施された普請工事である。尾張藩においても、天明期に時の藩主宗體によりいわゆる天明の河川改修が実施された。このとき新川の掘削とともに、日光川が改修され、その時津島川も築留られ、勝幡近辺で日光川・領内川・三宅川が合流する今日のような流路はこの改修によってなされた（図56）。

そして明治に入り、ヨハネス・デ・レーケによる木曾三川改修に伴い、佐屋川麻原等により、今日の河川の様相が安定化した。

（3）日置

日置の初見は、先述のように「和名抄」掲載の海部郡内の郷名に「日置」の名が確認できることであろう。

『臺記』1150（久安6）年7月8日条に「日置庄」の名がみえる。

『佐屋町史通史』によれば、この庄園の初期の歴史は詳らかではないが、藤原氏の所領となり、

保元の乱によって没収された。その後太皇后宮領となり、1187（文治3）年10月左女牛若宮に寄進された。

恐らく今日でいうところの日置八幡宮は、左女牛若宮の関係で創建されたものと思われる。「尾張志」によれば源頼朝が勅請したと伝える。

当宮には、1252（建長4）年銘をもつ木造獅子頭と1493（明応2）年銘をもつ懸仏が伝来する。

頼朝が勅請したかどうかは別としても、ほぼ同時期に当宮が成立していたものと推測しえるのでなかろうか。

1425（応永32）年の「満濟准后日記」の記述をみると、この年大洪水があつてかなりの水損があつたという。

1318（文保2）年12月23日付「関東御教書案」をみると、日置庄が富吉庄と境争論を行っていることから庄城は詳らかではないが、東は富吉庄と接していたことがわかる。

戰国期に入り、1533（天文2）年2月14日付の越前次田地充券に「日置」の名がみえ、この地域に土地を保有していたことが確認できる。同年7月24日には勝幡を訪ね滞在した京の山科言繼一行らは、日置八幡を訪れ、鰐右近から湯漬を振舞われ、その後守鳥天王を見物し、勝幡へ戻っている（『言繼卿記』）。

同一人物が同じ一党なのかは不明であるが、越氏がこの地においてある程度力を有していたことがわかる。

『尾張徇行記』によれば、坂田相模守家の先祖は日置村出身で日置八幡宮を氏神としたとある。坂田相模守家といえば、幕末に老中正睦を輩出した佐倉坂田氏をさす。

日置八幡宮は日置庄期も六条八幡宮の要職を勤めていることからすれば、日置の地は八幡宮を中心に集落を形成していたと考えられよう。（石田）

6. 日置の古地理環境

（1）日置本郷 B 遺跡で見つかった自然流路（図51・図55）

地籍図を用いた検討により日置本郷 B 遺跡調

査地点は日置稻葉微高地群（微高地群17）に分類され、表層地形解析との対応も調和的であった。また表層地形解析より、微高地の東縁には東に開口したさらに微小な谷地形が認められることを指摘した。ここでは、微小な谷地形と遺跡の調査結果との対応関係から、調査地点周辺の古地理環境について述べる。

表層地形解析の結果を基に遺跡の周辺のみに注目すると、遺跡の北側には津島市常盤町から愛西市日置町本郷にかけて北西・南東方向に標高-1.2～-0.6mまでの東へ開口した谷地形が認められる。対して遺跡の南には、県道一宮弥富線が日置町において屈曲する地点の東に標高-1.4～-0.8mの谷地形がみられる。

いっぽう、遺跡の調査結果において、調査区の北では中世後半期の考古遺物を含む河道跡（002NR）と近世の河道跡（001NR）が北傾斜の層理面をもって堆積していた。南では暗灰黄色のシルト層からなる河道跡（096NR）を置いて古代～奈良時代の考古遺物を含む地層と、中世後半期のものを含む地層と、中世後半期のものを含む地層と標高-2.50mをおおよその境として2分された。このように、表層地形解析の結果から北と南にみられるそれぞれの谷地形に対応するように、発掘調査でも北と南に分かれて河道路が検出された。地形のもの特徴と実際の発掘調査結果とはよく対応しており、遺跡でみられた河道路は谷地形の一部を見ているようである。

ところで、考古遺跡の下位層でみられる地層は全体に堆積構造の見られない塊状で均質な砂質シルト層から構成された。ここで注目されるのはこの砂質シルト層の一部が黒褐色（2.5Y3/2）を呈することである。堆積物が黒みを帯びる原因として、植物や動物などの生物体に由来する遺体や炭化物の濃集が考えられ、色調では同じ黒色や黒褐色に分類される堆積物もそれらの濃集の度合いにより黒みの強さはさまざまに変化する。また、水が流れ流れるような場所では生物遺体や炭化物は溜まりにくく、流水環境と生物遺体や炭化物の濃集とは負の相間ににあると言える。

調査区でみられた黒褐色を呈する砂質シルト層

は記載上では黒褐色（2.5Y3/2）に分けられるものの黒みの度合いは小さく、生物遺体や炭化物の含有量は少ない。黒みの色調の濃淡は堆積期間の休止期を現わしており、休止期間が長ければより黒みはつよく、短いときには淡くなる。調査区でも黒褐色の砂質シルト層が認められることから、砂屑物の供給量が一時に減少した時期があったと思われる。しかし、その色調が薄いことから、休止期は長くは続かず、休止期の後も現在の地表面（標高約-1.0m）まで層厚およそ1.5mほどのシルト層が上方に累積している事実から考えても、当地の近傍には砂屑物をもたらすだけの河川流路が存在したと考えねばならない。（鬼頭）

（2）日置をとりまく河道

最後に日置本郷B遺跡の周辺に存在した可能性のある旧河川について、明治17年の地籍図にみられた地形と現在の表層地形において対応した部分をもとに検討する。

地籍図の分析から抽出した地形において推定した新旧関係をもとに、中世にさかのぼる可能性のある旧河川は、江戸時代前期以前の天王川の旧河道に関連するもので、又吉低地部に直接つながる低地部であり、藤浪微高地群の北東より続く善田川西低地部とそれに続く愛宕西低地部、藤浪微高地群の南より車河戸大慶寺池低地部、中地低地部、須依落合低地部、中地低地部より続く日置西低地部がある。同様に佐屋川に直接つながる佐屋微高地群とその西にある佐屋西低地部、近世以後の堤である佐屋川東微高地群を挟んで北側で佐屋川から続く向島柚木低地部がある。向島柚木低地部は南東側において、天王川の堤防を挟んで向島村から柚木村へ続いている。

これらの地籍図に見られる低地部と現在の表層地形は先に述べたように概ね対応しているが、近代以後の道路建設や工場建設などにより大規模な地形変更が加わっているため、明治17年の地籍図の土地利用と微妙な差異が見られる。また地籍図や遺跡の調査成果においてもみられたように、中世後半期と江戸時代後期の構造・出土遺物の分布に大きな変化があることが確認できており、近世以後の様々な土地利用が行われた結果をみて

日置本郷B遺跡

るものである。

日置本郷B遺跡の調査地点は⑦日置稻葉微高地群の北端に位置しており、遺跡付近は⑦川原七坪微高地群や⑨愛弓微高地群との接点にある。また3つの微高地群の接点であることから、日置西低地部の北東端部と日置東低地部の北西端部、善田川中低地部の南西端部の接点にもなりうる地点である。発掘調査でみつかった09A区の南と北それぞれの自然流路跡は日置東低地部の北西端部に続くものであり、表層地形にみられる谷地形と対応している。この遺跡で見つかった自然流路跡の流下方向を推定するならば、流路は地籍図に見られる微高地群の接点である部分と対応する現在の表層地形に見られる谷地形が有力な候補となろう。同様な微高地群の接点としては、須依落合低地部の北西端部で愈佐屋微高地群と⑩袖木須依微高地群が接している部分において、現在の表層地形に見られる津島市常盤町から愛西市袖木町にのびる南北の谷地形がみられ、中地低地部の東側で⑥中地東微高地群と⑦川原七坪微高地群が接している部分においても、愛西市内佐屋村から愛西市北一色村につづく谷地形がみられる。よって、これらの地籍図にみられる低地部と現在の表層地形にみられる谷地形の時期は、文献資料からは江戸時代前期以前にさかのぼる地形と考えられ、さらに発掘調査成果からは古代にさかのぼる可能性があり、中世においても旧河川として存在した可能性が高く、江戸時代前期にかけて埋没したものと推定できる。
(藤山)

(3) 推定される日置の古地理環境

最後に、日置本郷B遺跡周辺の古地理環境を考えてみたい。まず、前節までの分析から、古代から中世にかけての日置本郷B遺跡の周辺には河川が流れている可能性が高いことが指摘された。また発掘調査成果から、遺跡の構造と出土遺物の分布から、古代から中世後半期にかけて存在した自然流路などの地形の起伏に強い影響を受けた営みが想定でき、調査区からはシジミやマガキなどの汽水生の貝類が検出されている事実から、汽水域の近くに存在したことが指摘されている。

遺跡の周辺でも古墳時代前期初頭からの遺跡が

確認されており、古代以後の遺跡は多くみつかっている。このような遺跡の歴史的展開については、『佐屋町史』において服部元之氏が指摘されたものを追認するものである。この服部氏の叙述の中で、日置付近の遺跡の立地を考える上で重要なもののとして山茶碗（ほとんどが12世紀後半から13世紀のもの）をともなって出土する貝類が挙げられる。服部氏の確認されたものとして、須依一稻葉遺跡（愛西市須依町・稻葉町）においてハマグリ・アサリ・ヤマトシジミ、元屋敷A遺跡（愛西市須依町、遺跡番号23）においてハマグリ・元屋敷B遺跡（愛西市須依町、遺跡番号23）においてハマグリ・アサリ、米野A遺跡（愛西市稲葉町、遺跡番号11）においてハマグリ・アサリ、大之内遺跡（愛西市西保町、本書図3遺跡番号48）においてマテガイ・ハマグリ・アサリ、城之内遺跡（愛西市西保町、本書図3遺跡番号46）においてハマグリがあり、山茶碗などの考古遺物を伴わないものとして、大正遺跡（愛西市東保町）においてハマグリ・アサリ・アカガイ、尾代遺跡（愛西市東保町）においてハマグリ・カガミガイ・アサリ、二町田遺跡（愛西市西條町）においてマガキ・イタボガキ・ハマグリ・アサリが確認されている（註5）。以上の遺跡分布から愛西市の日置町から稲葉町や須依町を経て、西條町や東保町、西保町にいたる北東から南西にかけての標高1.0m～2.0mの範囲が、中世の汽水域の近くに面する地域と考えられないであろうか。つまり、これらの地域が中世において海岸を臨む陸上河川との境界付近にあったと考えられる。加えて、等高線の間隔の広さは地形の傾斜が緩やかであることを示す。表層地形解析から調査地点の南東に標高-2.2m～-1.4mまでの等高線間隔の広い部分が認められ、緩やかな地形が開けた海岸の入り江状を呈する地形を形成していたと推定される。

そして中世において愛西市日置町付近に存在した日置荘では、年貢が畠によって納められていたように、尾張南部の荘園では耕が盛んに生産されていたことは著名なことである（註6）。その原風景ともいえる記述が先の述べた『海道記』の中にあり、河川などから上がった陸地では、桑が

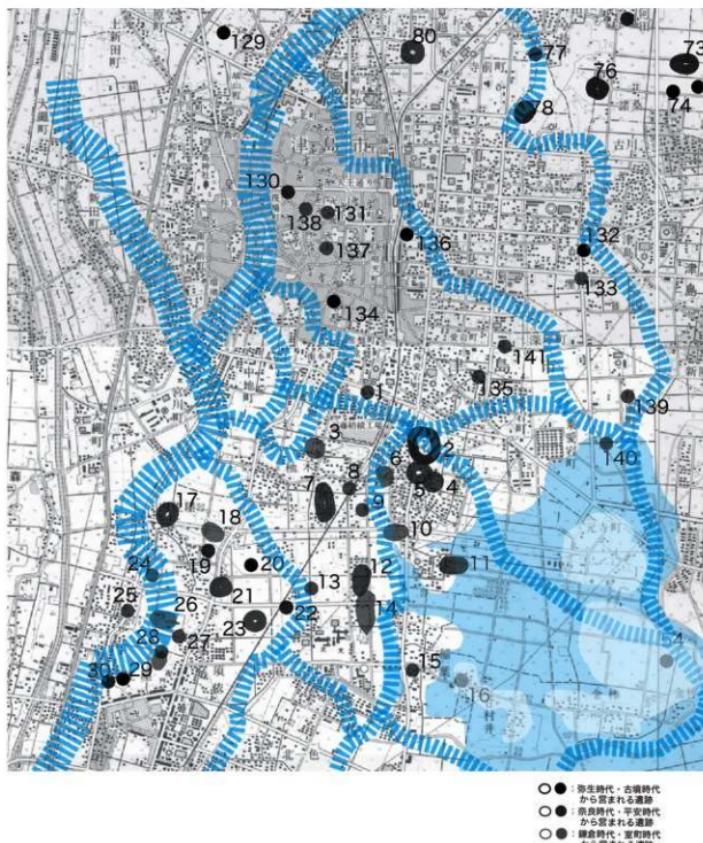


図 57 日置の古地理環境想定図
(青色点線は推定河川、青色縁み掛けは推定入り江、遺跡番号は本書第1章表1に対応する)

日置本郷 B 遺跡

生える畠地が存在し、宅などの建物がたち、駒が放し倒しにされている景観が広がっていたのである。

(鬼頭・藤山)

【註】

- (1) 服部元之 1996「第二章 考古」『佐屋町史』通史編、佐屋町史編纂委員会
 - (2) 湯浅健二・江崎武・赤塚次郎 1990「蜂須賀遺跡と「海部の古道」」『考古学フォーラム』1、愛知考古学談話会
 - (3) 赤塚次郎・石黒立人・宮腰健司・城ヶ谷和弘・池本正明 1990「寺野遺跡の出土遺物について 海部郡周辺の遺跡を探る」『考古学フォーラム』2、愛知考古学談話会
 - (4) 水野時二 1971『条里制の歴史地理学的研究』大明堂
 - (5) 海部・津島地域において、12世紀から13世紀の山茶碗が出土する遺跡として、愛西市二子町所在の北柳原遺跡において、山茶碗などとともにハマグリ・シジミ・アサリ・アカガイなどが出土し、津島市宇治町所在旭羊毛構内遺跡（国3遺跡番号122）において、12世紀後半～13世紀の山茶碗などの陶器とともにシジミ・ハマグリ・カキなどが、津島市中一色町所在中一色町遺跡（本図3遺跡番号127）において鎌倉時代から室町時代の土器と陶器に混じってハマグリ・カキなどが出土している。
 - 服部元之 2000「第2章考古」『八開村史』通史編、八開村役場所取の「北柳原遺跡」
 - 伊藤晃雄編 1970『津島市史』資料編（一）、津島市教育委員会所取の「宇治町旭羊毛構内遺跡」・「中一色町遺跡」
 - (6) 大山喬平 1978「絹と錦の莊園」『日本中世農村史の研究』岩波書店
- その他の参考・引用文献
- 佐織町史編さん委員会 1987『佐織町史』資料編二、
佐織町役場
- 佐織町史編さん委員会 1989『佐織町史』通史編、
佐織町役場

写真図版1 遺構



日置本郷B遺跡及び日置八幡宮から南を望む

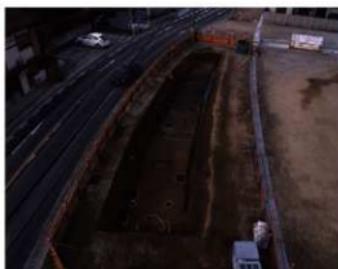


南から日置本郷B遺跡を望む（中央の大きな屋根が明通寺、その背後が日置八幡宮）

写真図版2 遺構



Aa 区全景（北より）



Aa 区全景（南より）



003SK 遺物出土状態（西より）



008SK 土層断面（東より）



005SK・006SK 検出状況（南より）



005SK 骨片出土状態（東より）



014SK・015SK（北西より）



015SK 鋼鉄出土状態（北西より）

写真図版 3 遺構



写真図版4 遺構



写真図版5 遺構



018SE 土層表面（南より）



018SE 木組み出土状態（北西より）



097SX 检出状況（北西より）



097SX 298・299 出土状態（北西より）



097SX 南辺東壁土層断面（北西より）



Ao区全景（南より）



096NR 東壁土層断面（北西より）



094SD 周辺東壁土層断面（西より）

写真図版6 遺構



Ba 区全景（北より）



Ba 区西壁土層断面（東より）



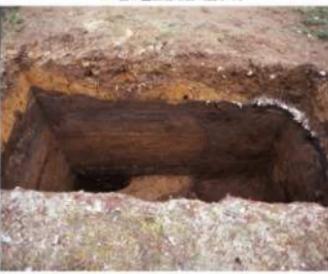
Bb 区全景（南より）



Bb 区東壁土層断面（西より）



Bc 区貝層検出状況（北より）



Bc 区東壁土層断面（西より）

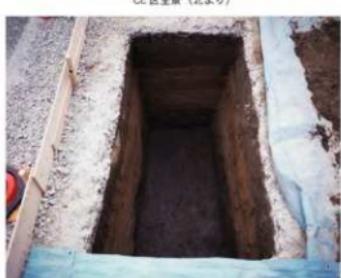


Ca 区貝層検出状況（南東より）



Cb 区東壁土層断面（西より）

写真図版7 遺構



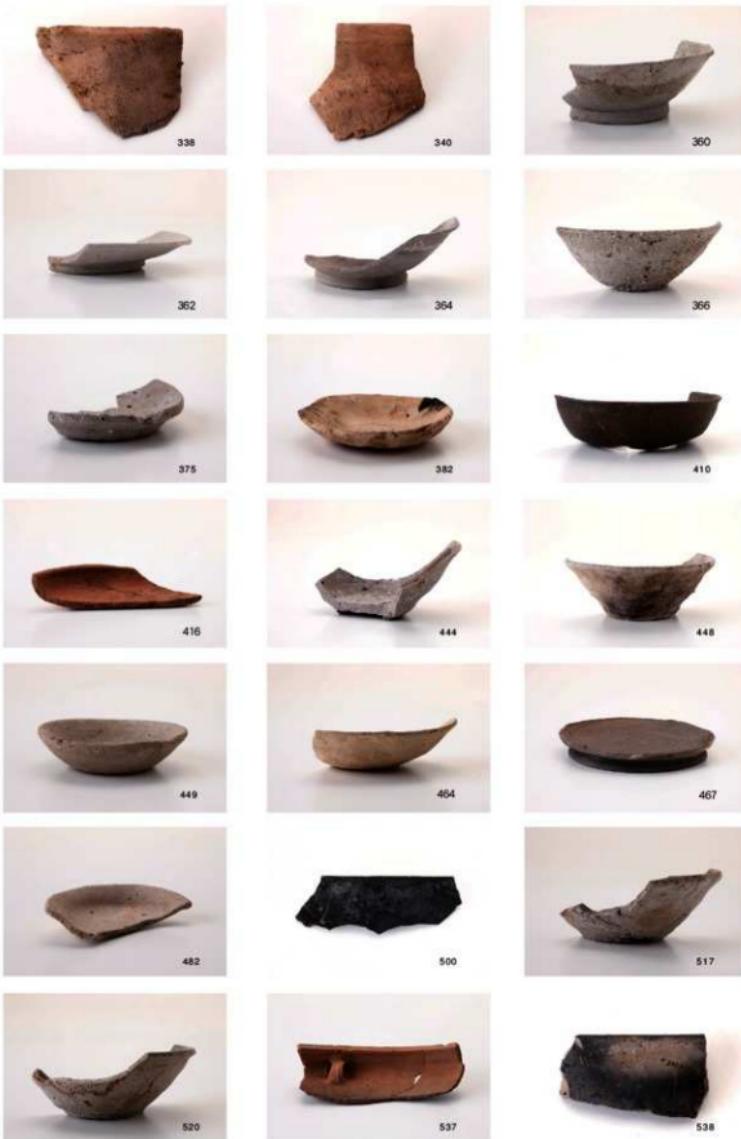
写真図版8 遺物



写真図版9 遺物



写真図版 10 遺物



写真図版 11 遺物



写真图版 12 遗物



写真図版 13 遺物



青磁



白磁



土器



加工丹型



製陶土器



陶丸



S03



S10



S11

写真図版 14 遺物



鉄製品

抄錄

ふりがな	へきほんごうビーアイエキ						
書名	日置本郷遺跡						
副書名							
巻次							
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第177集						
編著者名	石田泰弘・藤山誠一・鬼頭剛・黒沼保子・中村健太郎・宮腰健司						
編集機関	公益財團法人 愛知県教育・スポーツ振興財団 愛知県埋蔵文化財センター						
所在地	〒498-0017 愛知県名古屋市南ヶ須町野方802-24 TEL 0567-67-4163						
発行年月日	西暦2012年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 度 東経 度 調査期間	調査面積 m ²	調査原因		
へきほんごう 日置本郷 ビーアイエキ B遺跡	あいちほんごうへいじ 愛知県愛西市 へきほんごう 日置本郷	232327 37005	35度 9分 50秒	136度 43分 4秒	2010.12 ~ 2011.2	1,100	県道富島津 島羅自転車 歩行者道設 置
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
日置八幡宮 遺跡	集落跡	奈良時代・ 平安時代・ 鎌倉時代・ 室町時代・ 江戸時代	溝1条・土坑10基 孤立柱建物1棟・ 溝4条井戸1基・ 土坑25基 溝3条・土坑1基	須恵器・灰釉陶器・土師器 ・製塙土器 山茶碗・小皿・青磁・白磁・ 七輪器・土師・古瀬戸陶器・瓦・ 砥石・井干組み版 陶器・土師器・磁石			古代から中世にかけ ての集落跡
文書番号	発掘記録(21埋セ第77号、平成21年10月22日付) 通知(21教生第1689号、平成21年11月12日付) 終了届・発見届・保管証(21埋セ第118号、平成22年3月1日付) 監査結果通知(21教生第2719号、平成22年3月29日付)						
要約	奈良時代から平安時代前期にかけての遺構と遺物、平安時代末から室町時代にかけての遺構と遺物、江戸時代後期の遺構と遺物が確認され、奈良時代から平安時代前期には集落跡の居住域が認められ、平安時代後から室町時代にかけては、集落跡の居住域と墓地が堆疊された。そして、遺構・出土遺物の分布状況から、奈良時代から室町時代にかけての集落跡が、江戸時代後期の集落跡に比べて、自然地形の起伏による影響をより強く受け形成されていた状況がみられた。						

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第177集

日置本郷 B 遺跡

2012年3月31日

編集・発行 公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 新日本法規出版株式会社